

4月発行予定であったものが、種々の事情により遅延してしまいました。担当編集委員として、まずこの点をお詫びしておきます。

本特集は小幡道昭が上梓された『経済原論 ——基礎と演習——』(2009年11月、東京大学出版会)を俎上に載せようとするものです。小幡氏も参加されている研究集団SG-CIMEでは2010年の8月8日~10日に行った夏合宿で同書を集中的に採り上げ、長時間にわたって様々な論点を議論しました。そのときの議論をニュースレターで再現することがこの特集の当初の狙いでした。そこで、SG-CIME夏合宿時の時にコメンテーターを担当した諸氏に再度のコメントをお願いし、これに小幡氏のリプライを頂くという形で企画を立てました。

しかしながら、小幡『原論』は、教科書として「練習問題」まで収めながら、極めてラディカルでユニークでした。その論理と意味を理解するためには相当量の前提的な議論・理解が不可欠でした。合宿の討論ではそうは感じなかったのですが、活字になった各論者のコメントを検討してみると、数行で回答が書けるようなものはほとんどありません。コメントで採り上げられた個々の論点に簡単に答えるだけで、宇野弘蔵の『演習 経済原論』のような書物のサイズにならざるを得ない。質問の内容によっては、それへの回答だけで論文一本を要するようなものもあるように思えました。

このような膨大な仕事を小幡氏にお願いすることはできませんし、小幡『原論』に初めて接するような人にはその基本的な発想・考え方を理解が難しいように思えました。そこで、小幡氏自身に本書の意図、特長、意義というような点を述べて貰うということを中心にし、コメントに対する回答はできる限りです、という方針でリプライに相当するものを書いて貰うことにしました。この結果書かれたのが「変容論的アプローチによる原理論」という論攷です。明示されてはいませんが、コメントに対する回答にあたる記述は処々にあります。

コメントにせよ、小幡氏のリプライにせよ、いずれも様々な点で論争喚起的で、言い換えれば‘挑発的な’問題提起を含んでいます。このような性格を踏まえつつ、小幡『原論』と併読されることから、さらなる議論が継続することを望みます。